

# 青森県立郷土館だより

News from the Aomori Prefectural Museum

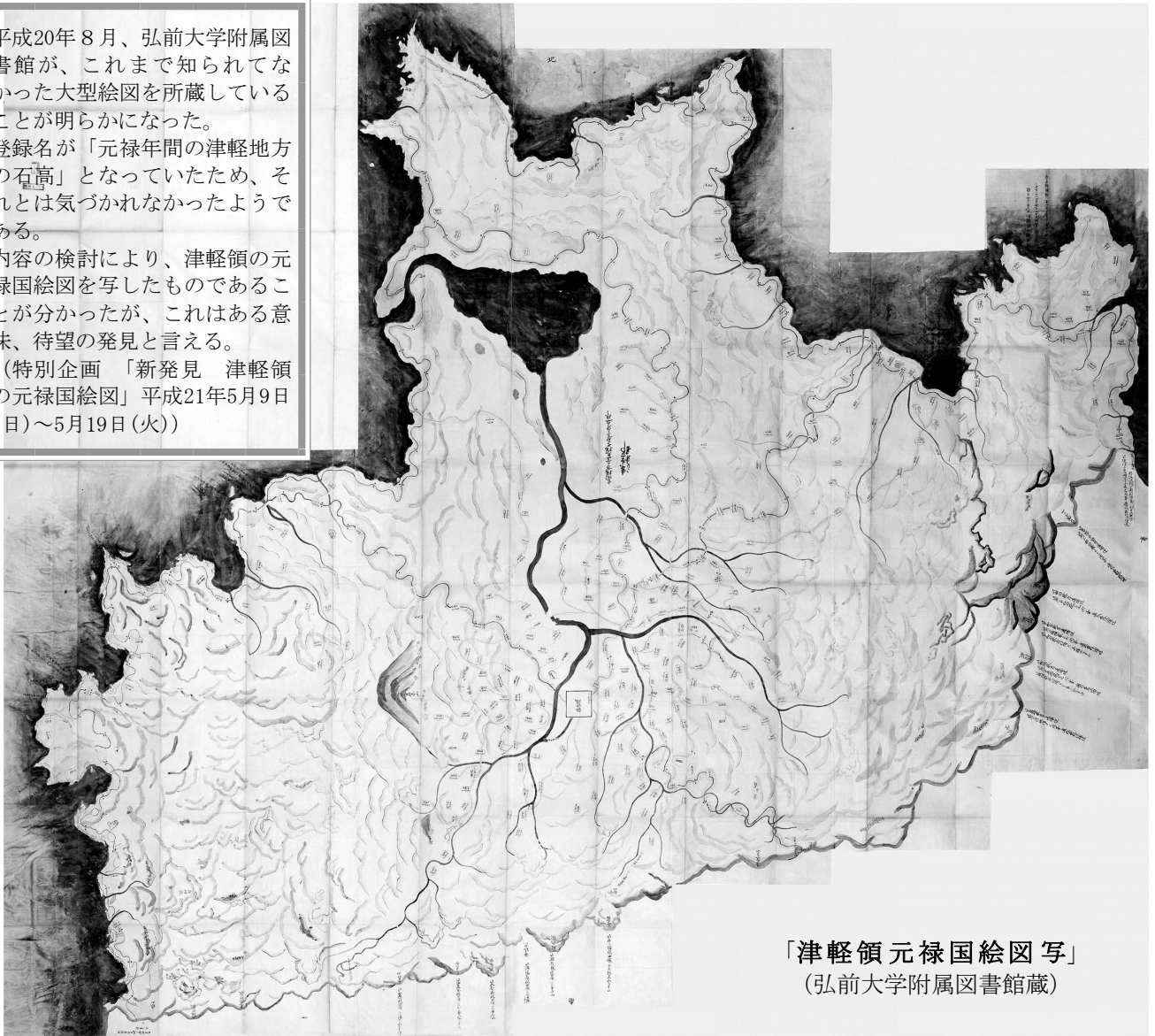
通巻146号 平成21年（2009）6月25日 Vol.40 No.1

平成20年8月、弘前大学附属図書館が、これまで知られてなかった大型絵図を所蔵していることが明らかになった。

登録名が「元禄年間の津軽地方の石高」となっていたため、それとは気づかれなかったようである。

内容の検討により、津軽領の元禄国絵図を写したものであることが分かったが、これはある意味、待望の発見と言える。

（特別企画「新発見 津軽領の元禄国絵図」平成21年5月9日（日）～5月19日（火））



「津軽領元禄国絵図写」  
（弘前大学附属図書館蔵）

国絵図は、徳川幕府が諸大名に命じて作成・提出させたものである。山川湖沼・港湾・道路など多くの地理情報を含む地図資料として、また、当時の村数・村名・村高を把握するための財政資料として、歴史研究上、高く評価されている。

「津軽領元禄国絵図写」と命名されたこの絵図には、元禄14年（1701）11月の年紀がある。大きさは339cm×397cmで、正保2年（1645）に提出された正保国絵図「陸奥国津軽郡之絵図」（当館蔵）より少し小さく、東西南北は裁断されている可能性がある。さらに比べてみると、弘前城下の形状が口になっている（正保国絵図では○）、岩木山に冠雪の表現がない（正保国絵図では雪がある）、夏泊半島に狄村の記載がない（正保国絵図では3カ村あり）など、正保国絵図とは異なる部分が認められる。後世の写しではあるが、内容は津軽領の元禄国絵図そのものと見て

よい。

津軽領の国絵図は正保・元禄・天保の3度作成されたと考えられているが、このうち、元禄度のものだけが見つかっていなかった（正保度のものとしては当館蔵「陸奥国津軽郡之絵図」が、天保度のものとしては国立公文書館蔵「天保陸奥国津軽領絵図」がある）。3者を比較することで、それぞれがどのような共通点・相違点を持っているのかを検討できるようになった意義は大きい。

天保国絵図の下書きは元禄国絵図を元にしており、弘前市立弘前図書館に関係資料が残っているので、そこから復元できるのではないかと指摘もなされていたが、総体的な姿をつかむという点で、実物に勝るものはない。それゆえ、「津軽領元禄国絵図写」の発見は、いっそう貴重なのである。

（研究主幹 本田 伸）

平成21年度 青森県立郷土館行事予定

新暦日	4月	5月	6月	7月	8月	9月	新暦日
1	旧三月 水 六日	旧四月 金 七日	旧五月 月 九日	旧閏五月 水 九日	旧六月 土 十一日	旧七月 火 十三日	1
2	木 七日	八十八夜 土 八日	火 十日	木 十日	日 十二日	水 十四日	2
3	金 八日	憲法記念日 日 九日	水 十一日	金 十一日	月 十三日	木 十五日	3
4	土 九日	みどりの日 月 十日	木 十二日	土 十二日	火 十四日	金 十六日	4
5	日 十日	こどもの日 火 十一日	金 十三日	日 十三日	水 十五日	土 十七日	5
6	月 十一日	旗替え日 水 十二日	土 十四日	月 十四日	木 十六日	日 十八日	6
7	火 十二日	木 十三日	日 十五日	火 十五日	金 十七日	月 十九日	7
8	水 十三日	金 十四日	月 十六日	水 十六日	土 十八日	火 二十日	8
9	木 十四日	土 十五日	火 十七日	木 十七日	日 十九日	水 廿一日	9
10	金 十五日	日 十六日	水 十八日	金 十八日	月 二十日	木 廿二日	10
11	土 十六日	月 十七日	木 十九日	土 十九日	火 廿一日	金 廿三日	11
12	日 十七日	火 十八日	金 二十日	日 二十日	水 廿二日	土 廿四日	12
13	月 十八日	水 十九日	土 廿一日	月 廿一日	木 廿三日	日 廿五日	13
14	火 十九日	木 二十日	日 廿二日	火 廿二日	金 廿四日	月 廿六日	14
15	水 二十日	金 廿一日	月 廿三日	水 廿三日	土 廿五日	火 廿七日	15
16	木 廿一日	土 廿二日	火 廿四日	木 廿四日	日 廿六日	水 廿八日	16
17	金 廿二日	日 廿三日	水 廿五日	金 廿五日	月 廿七日	木 廿九日	17
18	土 廿三日	月 廿四日	木 廿六日	土 廿六日	火 廿八日	金 三十日	18
19	日 廿四日	火 廿五日	金 廿七日	日 廿七日	水 廿九日	土 旧八月一日	19
20	月 廿五日	水 廿六日	土 廿八日	月 廿八日	木 旧七月一日	日 秋社日	20
21	火 廿六日	木 廿七日	日 廿九日	火 廿九日	金 二日	月 三日	21
22	水 廿七日	金 廿八日	月 三十日	水 旧六月一日	土 三日	火 旧四月四日	22
23	木 廿八日	土 廿九日	火 旧閏五月一日	木 二日	日 処暑	水 秋分の日	23
24	金 廿九日	日 旧五月一日	水 二日	金 三日	月 五日	木 六日	24
25	土 一日	月 二日	木 三日	土 四日	火 六日	金 七日	25
26	日 二日	火 三日	金 四日	日 五日	水 七日	土 八日	26
27	月 三日	水 四日	土 五日	月 六日	木 八日	日 九日	27
28	火 四日	木 五日	日 六日	火 七日	金 九日	月 十日	28
29	水 五日	金 六日	月 七日	水 八日	土 十日	火 十一日	29
30	木 六日	土 七日	火 旧閏五月八日	木 九日	日 十一日	水 旧八月十二日	30
31		日 旧五月八日		金 旧六月十日	月 十二日		31

○催し物

ミュージアム探検隊 土・日・祝日・春休みに開催  
 郷土館クイズラリー 夏休み・冬休みに開催  
 夏休みこどものくに 8月2日(日) 8月9日(日)  
 づぐり回し大会 冬休みに開催

展示解説ツアー 毎週日曜日午後2時  
 調べ学習応援団 随時  
 移動博物館 学校の申込みに応じて実施  
 自然観察会 十二湖 6月28日(日)

○土曜セミナー (上半期)

郷土館小ホール

4月11日	津軽地方の竹籠作り	成田 敏 学芸員
4月18日	棚田を旅して-長野県嫉捨・青鬼、そしてフィリピン・コルテ・エラ山地	斎藤 岳 主任学芸主査
4月25日	博物学の話	山内 智 副参事
5月2日	ツクシとスギナの植物学	木村 啓 ゲストキレター
5月9日	地質の日記念-地質図のみかた	島口 天 主任学芸主査
5月16日	国際博物館の日記念 「博物館とは」	成田 敏 学芸員
5月23日	青森県のスカラベ	阿部 東 ゲストキレター
5月30日	著書からみた一戸直蔵	小熊 健 ゲストキレター



新暦日	10月	11月	12月	1月	2月	3月	新暦日
1	旧八月 木 十三日	旧九月 日 十五日	旧十月 火 十五日	旧十一月 金 十七日	旧十二月 月 十六日	旧一月 月 十六日	1
2	金 十四日	月 十六日	水 十六日	土 十八日	火 十九日	火 十七日	2
3	土 十五日	文化の日 火 十七日	木 十七日	日 十九日	水 二十日	水 十八日	3
4	日 十六日	水 十八日	金 十八日	月 二十日	木 廿一日	木 十九日	4
5	月 十七日	木 十九日	土 十九日	火 廿一日	金 廿二日	金 二十日	5
6	火 十八日	金 二十日	日 二十日	水 廿二日	土 廿三日	土 廿一日	6
7	水 十九日	立雪 土 廿一日	月 廿一日	木 廿三日	日 廿四日	日 廿二日	7
8	木 二十日	日 廿二日	火 廿二日	金 廿四日	月 廿五日	月 廿三日	8
9	金 廿一日	月 廿三日	水 廿三日	土 廿五日	火 廿六日	火 廿四日	9
10	土 廿二日	火 廿四日	木 廿四日	日 廿六日	水 廿七日	水 廿五日	10
11	日 廿三日	水 廿五日	金 廿五日	月 廿七日	建國記念の日 木 廿八日	木 廿六日	11
12	体育の日 月 廿四日	木 廿六日	土 廿六日	火 廿八日	金 廿九日	金 廿七日	12
13	火 廿五日	金 廿七日	日 廿七日	水 廿九日	土 三十日	土 廿八日	13
14	水 廿六日	土 廿八日	月 廿八日	木 三十日	日 旧一月一日	日 廿九日	14
15	木 廿七日	日 廿九日	火 廿九日	金 旧十二月一日	月 二日	月 三十日	15
16	金 廿八日	月 三十日	水 旧十一月一日	土 二日	火 三日	火 旧二月一日	16
17	土 廿九日	火 旧十月一日	木 二日	日 三日	水 四日	水 二日	17
18	日 旧九月一日	水 二日	金 三日	月 四日	木 五日	木 三日	18
19	月 二日	木 三日	土 四日	火 五日	金 六日	金 四日	19
20	秋土用入り 火 三日	金 四日	日 五日	水 六日	土 七日	土 五日	20
21	水 四日	土 五日	月 六日	木 七日	日 八日	日 六日	21
22	木 五日	日 小雪 六日	火 七日至 七日	金 八日	月 九日	振替休日 月 七日	22
23	金 六日	月 動労感謝の日 七日	水 天皇誕生日 八日	土 九日	火 十日	火 八日	23
24	土 七日	火 八日	木 九日	日 十日	水 十一日	水 九日	24
25	日 八日	水 九日	金 十日	月 十一日	木 十二日	木 十日	25
26	月 九日	木 十日	土 十一日	火 十二日	金 十三日	金 十一日	26
27	火 十日	金 十一日	日 十二日	水 十三日	土 十四日	土 十二日	27
28	水 十一日	土 十二日	日 十三日	木 十四日	日 旧一月十五日	日 十三日	28
29	木 十二日	日 十三日	火 十四日	金 十五日		月 十四日	29
30	金 十三日	月 旧十月十四日	水 十五日	土 十六日		火 十五日	30
31	土 旧九月十六日		木 旧十一月十六日	日 旧十二月十七日		水 旧二月十六日	31

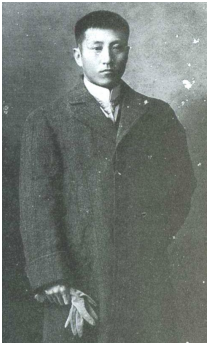
6月13日	東北地方の古代水田跡	成田誠治 ゲストキレター
6月20日	大衆魚の豊漁・不漁の歴史	石戸芳男 ゲストキレター
6月21日	津軽海峡とマグロ漁	昆 政明 学芸課長
7月4日	出産の近代化 ～テンガクから助産婦へ～	長谷川方子 ゲストキレター
7月11日	写真でみる昭和30年代の北国の人々の暮らし	相馬信吉 副 参 事
7月18日	多色木版画は理系向き	對馬恵美子 学芸主幹
7月25日	廻郷役人が食べたオカズの話 ～当時の食文化を考えてみるために～	桜井冬樹 ゲストキレター
8月1日	歌曲でつづるあおもり近現代	竹村俊哉 主任学芸主査
8月8日	青森県海藻	平井正和 ゲストキレター
8月15日	特別展予告 異界との交流史	小山隆秀 学芸主査
8月22日	平安時代に起こった出羽国から一津軽への大量移民とその実態	三浦圭介 ゲストキレター
8月29日	芸術は人生に必要な夢 ～現代美術とのかかわり方～	岩井康頼 ゲストキレター
9月5日	津軽の秘薬「一粒金丹」と渋江抽斎	本田 伸 研究主幹
9月12日	あおもり 街の記憶(1) 明治時代	安田 道 研究主幹
9月19日	じょんがら・じょんから	北川達男 研 究 員
9月26日	ふるさとの風俗・民俗あれこれ(3)	今純一郎 ゲストキレター

土曜セミナー

明治期に英国に渡った水彩画家 松山忠三

学芸主幹 對馬恵美子

松山忠三（まつやまちゅうぞう）という画家を知っている人はどれくらいいるのでしょうか。ここでは簡単に、その人物について紹介したいと思います。



松山忠三は明治13年（1880）、板柳町で生まれました。父久兵衛と母みには11人の子があり、忠三は四男でした。忠三の家は、津軽随一の大長者といわれた井筒屋（かねちゅう）の別家で、「かねちゅうに」の屋号を名のっていました。し

かし、忠三が11歳の時、父の事業の失敗で一家は離散し、忠三は函館に奉公に出ました。

明治40年頃、日本で大流行していた水彩画の魅力に憑かれた忠三は単身上京し、水彩画家として著名な大下藤次郎の水彩画研究所で学び、明治の終り頃には、専門雑誌「みずゑ」に、度々作品が掲載されるまでになりました。

忠三は、水彩画の本場イギリスで学ぶ決意をし、明治44年に渡英して、チェルシー美術学校に入りました。大正初期には、イギリスのロイヤルアカデミーの会員にもなっています。



コルドハーバー（1923年）水彩・鉛筆 34.0×49.5cm

つつましく暮らす人々への忠三の優しい視線が感じられます。

平成8年、恒松氏の所蔵する忠三作品約120点を当館が借り受け、特別展「日本近代水彩画の全盛期と松山忠三展」を開催しました。期間中は1万人を超える入館者が訪れ、好評を博しました。これだけ多くの人たちが訪れたのは、やはり、忠三作品のもつ魅力によるものでしょう。水彩画特有のやわらかいタッチや、透明感あふれる色彩に加え、描かれているイギリスの街並みや風景の中に、

（3月14日／小ホール）

しかし、第二次世界大戦の勃発によってイギリスと日

人事異動

(退職)	館長	白鳥 隆昭
(転入)	館長	外崎 純一
○総務課		
(転入)	総務課長	工藤 伸一
(退職)	副参事	今 進
(転出)	主幹	勝野 まり子

(転入)	主幹	田中 博
(転入)	主査	油布 恵美
(転出)	主事	田中 貢
○学芸課		
(転入)	研究主幹	工藤 睦美
(転出)	研究主査	渡辺 真路
(退職)	解説員	吉崎 祐加

(退職)	解説員	岩葉 智香
(退職)	解説員	長内 香澄
(退職)	解説員	齊藤 麻耶
(採用)	解説員	木村 菜穂
(採用)	解説員	坂本 理恵
(採用)	解説員	中谷 美香
(採用)	解説員	三浦 絢子

青森県立郷土館だより Vol. 40 No. 1 通巻146号 2009. 6. 25

【編集・発行】 青森県立郷土館 〒030-0802 青森市本町二丁目8-14

【TEL】 017 (777) 1585(代) 【Fax】 017 (777) 1588

【電子メール】 E-KYODOKAN@pref.aomori.lg.jp

【ホームページ】 http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/culture/kyodokan.html

